

小児の専門医育成へ

横浜市大大学院と神奈川県立こども医療センターが連携 (2011年12月6日)



小児医療の専門医育成で連携協定を結んだ
横田医学部長（左）と大濱総長＝横浜市大
福浦キャンパス

子どもの先天性疾患や難治疾患などについて現場医師と研究者らが協力して治療をしていこうと、横浜市大大学院医学研究科（同市金沢区）と県立こども医療センター（南区）が6日、市内で連携推進の協定を結んだ。人材交流を通して県内の小児医療の質を高めるのが狙い。市大の横田俊平医学部長らは「より専門性を持つ小児科医をたくさん生み出せる」と期待している。小児の専門病院と大学の人材交流は全国的にも例がないという。

こども医療センターは県内全域をカバーする小児医療の中核施設で、子どもの難治疾患などについて豊富な臨床例を扱っている。一方で、横浜市大は疾患を治療するために遺伝子レベルでの研究などを進めている。現場医師と研究者らが垣根なくそれぞれ交流をすることで、新たな治療方法を開発したり、医師個人がより幅広い知識や技術を身に付けられるという。

連携の具体化は来春以降で、市大側は大学院生をこども医療センターの研修医などとして送り、医療現場の実際の症例に携わり経験を積める。センターに勤務する研修医らも大学院生として研究現場に入り、博士の学位を取得できるようになる。

さらに、同センターの医師が市大の客員教授として教育・指導するなど、より高度な治療を行える人材育成に力を入れる。

同センターの大濱用克総長は「センターだけでは解決できない症例もある。市大と連携して子どもたちのために成果を出したい」と話す。全国的に小児科医が不足傾向にある現状を踏まえ、横田医学部長は「今後の小児医療を担う専門家を多く育てる仕組みにしたい」と意気込んでいる。